

Chapter 1: Social Motivation; Introduction and overview

In Joseph P. Forgas, Kipling D. Williams and Simon M. Laham (eds.)

Social Motivation; Conscious and Unconscious processes

Cambridge University Press

Rep. 脇本竜太郎¹

本章の構成

0. Introduction

1. Motivation in Social Psychology: The Background・・・社会心理学における動機概念の帰趨の概説

2. Social Motivation in Social Psychology・・・社会心理学における社会的動機に関する概説

3. Affect and Social Motivation

4. Conscious and Unconscious Social Motivation

5. Overview of the volume 本書の各章の概略

0. Introduction

◇古代から哲学者や作家を魅了してきた人間行動の性質・・・目的性と意図性(**purposive and intentional quality**)

→全ての社会的行動や判断はなんらかの目標に動機付けられていると主張することも可能

◇全ての動機づけられた行動が、意識的とは限らない

→社会的行動は殆ど自動的・即応的(**spontaneous**)で、意識的自覚を伴わずに行われるということが近年認識されるようになってきている。

→行為者は、社会的行動の原因に気づかないだけでなく、しばしば誤った因果的説明を行ってしまう

- ・“意図的、目的性、目標思考的な社会的行動”という考え全体が間違っている？
- ・“意識的で理性的で目標志向的である”という人間観を修正する必要性を示唆？
- ・動機と認知、意識的動機プロセスと非意識的動機プロセスの関係は？
- ・外発的・内発的、意識的・非意識的な動機的影響は、どのように相互作用して行動の生起に影響するのか？

←本書でアプローチする問題の1部

2. Motivation in Social Psychology: The Background

◇人間の動機づけられた、志向的(**directed**)な行動の先行要因として“動機”という単語が心理学者に使われ始めたのは1880年代

- ・それ以前はより不定形な“意志”(will)という言葉が哲学者や理論家によって使われていた。
- ・当初、動機は志向的行動に関して、人を行動に駆り立てられるものとして考えられた。

¹ 東京大学大学院教育学研究科博士課程 e-mail:wyvern@p.u-tokyo.ac.jp

- ◇20世紀初頭に立場が分かれる→この時点で意識を重視する立場と無意識を重視する立場が存在
 - ・本能による説明という観点から動機を概念化し、意識的な思考や選択、目標追及を動機プロセスの一部とは考えない立場(Darwin, 1872 ; Freud, 1915; McDougall, 1908)
 - ・認知的・理性的なアプローチをとり、意識的で志向的な意思が重要な動機的推力(motivational force)になると考える立場(James, 1890)

◇動機受難の時代・・・行動主義の蔓延

- ・内的心理的過程に対する教義的な拒絶
 - 動機に関心が向けられなくなり、また、人間ではなく動物の飢えや渇きなど動因状態の変化と考えられるようになる。
- ・しかし、行動主義のSR図式による説明は、現在では非意識的な社会的動機と考えられているThorndikeの“habit”概念に強く影響を受けている

◇しかし、SR図式での説明が不十分であることはすぐに明らかになる

- ・HullやTolmanのような新行動主義者ですら、人間の社会的行動の有意味な説明には行動の動機的性質の考慮が必要であることを認めた。

→目標、願望、欲求が、個人と環境との相互作用に及ぼす影響の大きさの認識

- ・このような認識は当時の社会心理学にも反映される
 - ・・・Heider, Lewin, Festinger等が動機的成分を明確に含んだ社会的行動の理論を提唱
 - ←行動主義の闇の時代にあっても社会心理学が動機的・認知的であることができたのは彼らによるところが大きい

◇上記3人の社会心理学者の共通点

- ・・・動機的力、社会的世界に関する意識的・無意識的な表象を人間行動の鍵として特に強調している点
 - Heider：一貫した有意味な心的表象に対する根源的欲求を、社会的行動・思考を動機付ける推力として重視（バランス理論）
 - Lewin：行為者が持つ生活空間の心的表象に基づく力動的・動機的な行動の説明(場の理論)
 - Festinger：不可解で予期から外れる、一見不合理な社会的行動に対する明確な動機的説明(認知的不協和理論)
- これら理論のおかげで、行動主義がばかばかしい制約を課していた時代においても、社会心理学における動機研究は潰えることがなかった。

◇動機不遇の時代

- ・1970年代の認知革命→“冷たい”社会的認知の立場から、社会的行動に関して動機的説明を排除し、認知的・情報处理的観点からの解釈を行う動き

◇我々の立場

- ・動機のみによる説明では勿論不十分
- ・上にあげた3人の社会心理学者のように、認知的説明と動機的説明を統合することが目的

2.Social Motivation in Social Psychology

- ◇今まで、社会的認知隆盛の中にあっても、対人的相互作用の領域では、理論的・実証的に複数の動機が注目されてきた

➢所属への動機；進化的視点、人間の群居性(gregariousness)を考えれば至極重要。経験的にも実

証的にも、適応と自我同一性の健康な感覚の維持には必須であることは明白。

- 生存への動機：最も根源的で基礎的な動機。死の脅威を緩衝しようとする動機が、象徴的な防衛（文化や自尊心の維持・防衛）を惹起させるという知見も。
- 認知的一貫性動機：認知的一貫性動機は、認知的・知覚的プロセスを動員し、全体として一貫して有意義な社会的世界の表象を形成させる。一貫性がないと、人は効果的な対人関係を企図、参与することが難しくなってしまう。
- 正確さへの動機：認知的一貫性動機と同様、人間が社会的環境でいかに上手く振舞うか理解するのに重要。→帰属や因果推論の研究に影響
- 動機の外発性・内発性・・・社会的情報処理と対人相互作用に影響

- ◇上記のような比較的大きいものに加え、特定の社会的目標を目指したより特定の動機的志向性も存在。そのなかで主なものは、自己に関連した動機的戦略
→自尊心への欲求、自己評価への欲求、自律性'(authenticity)への欲求・・・健康な社会生活のため重要

3.Affect and Social Motivation

◇感情：動機プロセスにおいて重要な役割を果たす

→認知革命初期の頃は“冷たい”説明が横行し軽視されるが、近年多くの研究者が注意を向け、興味深い知見が報告されている。

➤Carver & Scheier(1998)

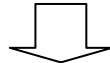
感情を動機付けられた、目標志向的行動の進捗を示すシグナルとして捉える²

➤Forgas(2002)

中程度の気分状態が人間の社会的場面での知覚、解釈、反応、コミュニケーションに大きな影響を及ぼすことを報告

◇情動が動機に及ぼす影響・・・動機付けられた認知的方略の研究でもっとも明らか

- ・肯定的情動：環境に危険がないことを行為者に伝え、同化的、トップダウン的、創造的处理を動機付ける→親和度の高い環境に適した方略
- ・否定的情動：環境に危険があることを行為者に伝え、系統的、細部に気を配る(**detail-oriented**, ボトムアップとほぼ同義?), 調整的(**accommodative**)処理を動機付ける
→新奇もしくは困難な環境に適した方略
→肯定・否定的気分のほかにも、恐怖や怒りなどの特定の感情が知覚・認知過程に影響を及ぼすことが報告されている(**Neuberg & Weiss** の章参照)



動機、感情、認知の相互作用検討の必要性

◇また、多くの動機的・感情的プロセスは、認知プロセスに働きかけることによって効果を発揮する(**Kunda, 1999**)→熱いプロセスへの注目、また双方を検討することの必要性を示す

◇近年の新たな研究課題

いつ、そしてなぜ、社会的動機は意識的であったり、無意識的であったりするののか？

² 以前の読書会でやった、目標達成のスピードが感情を生起させるというお話だと思われます。

4. Conscious and Unconscious Social Motivation

◇最近の社会心理学研究における潜在的認知プロセスへの注目→動機も研究のターゲットに
→意識的・非意識的知覚, 認知, 動機プロセスの相互作用を検討する必要性が徐々にあきらかになっていく(Bargh & Ferguson, 2002)

◇見解の相違



◇非意識的動機の歴史概略

- ・1950～60年代のサイバネティクスの発想：システムは、意識的介入がなくとも環境からのフィードバックのみにより行動を制御できる
→一見複雑で目的的で目標志向的な行動も、選択や推論等意識的プロセスなしで示されうる
- ・印象形成(Chartrand & Bargh, 1996), 課題遂行(Bargh & Gollwitzer, 1994), 感情の経験(Chartrand & Bargh, 1999)等, 社会的認知研究の領域でも, 非意識的動機が働くことが示されている.

→非意識的な動機は, 認知的処理法略のみならず, 観測可能で明示的に目的的で動機づけられた社会的行動にも影響を及ぼす

⇒ 社会的動機研究では, 行為者の意識的・非意識的世界双方を検討することが必要.

5. Overview of the volume

◆Part I. Conscious and Unconscious Social Motivation: General Issues.

➤Chapter2

・課題への継続的参与に影響を及ぼす内的・外的要因の検討, および最善の動機(optimal motivation)に関する議論

➤Chapter3

・意識的・非意識的な死の志向が動機に及ぼす影響, および死の思考に対する対処プロセスについての議論

➤Chapter4

・社会的行動が潜在的・非意識的な要因によって影響を受けるか, 顕在的・意識的な要因によって影響を受けるのかを決める境界条件に関する議論

➤Chapter5

・努力や課題への参与が社会的行動に及ぼす影響の検討. 一時的な課題参与を心拍で測定する方法の提案

➤Chapter6

・Reflective Impulsive Model(RIM)による社会的行動の説明. Reflective system は事実や価値に関する知識によって駆動し, Impulsive system は連合と動機的志向によって駆動. この2つの相互作用により社会的行動が制御されるという議論.

➤Chapter7

・社会的動機がどのように認知に影響するかについての議論. 潜在的思考は, 顕在的な動機がそれを状況に対して適用可能にするときに最も行動に影響するようであると主張.

◆Part II. Social Motivation: Cognitive and Affective Implications

➤Chapter8

- ・初期段階の認知処理に及ぼす社会的動機の影響. 選択的注意およびその結果を規定する要因に関する議論.

➤Chapter9

- ・目標伝染(goal contagion)に関する議論. 人は他者の行動から当該人物の目標を自動的に推論し, その推論された目標を即時的に追求しようとする.

➤Chapter10

- ・社会的動機において感情が果たす役割に関するレビューと統合的モデルの提示

➤Chapter11

- ・情報の符号化の仕方の違い(内的符号化傾向と外的符号化傾向)が社会的動機と判断に及ぼす影響の検討.

➤Chapter12

- ・authenticity の多面的な概念定義の提案と, その概念が社会的動機といかに関連するかの議論.

➤Chapter13

- ・動機プライミングに関する興味深い複数の研究の紹介

◆Part III. Conscious and Unconscious Social Motivation: Some Consequences and Applications

➤Chapter14

- ・非偏見の態度・行動の表明に果たす内発的・外発的動機の役割

➤Chapter15

- ・潜在的, 顕在的な嫌悪的人種差別主義の動機的性質に関する議論. 特に顕在的には差別を表明しないにもかかわらず, 潜在的測度では差別的認知を示す者に焦点を当てる.

➤Chapter16

- ・社会的追放(social ostracism)を受けた時に人が採用する動機の方略に関する考察

➤Chapter17

- ・職場での遂行に対する動機に感情状態が及ぼす影響

➤Chapter18

- ・ナルシズムが動機と対人的な自尊心に及ぼす影響

➤Chapter19

- ・本書のまとめ
- ・社会的認知に関する 3 つの基本的な問に対する議論
 - (a)社会的動機における意識的プロセスと非意識的プロセスの関係は?
 - (b)自己制御は動機をいかに媒介するのか?
 - (c)社会的動機における進化の役割
- ・意識の 3 元モデル(tripartite model)の提案.